

# 第 35 回 関東・東北ブロック研究会 会報

平成 20 年 2 月 17 日 (日)、鶴見大学会館において、第 35 回関東・東北ブロック研究会が開催された。約 40 人が出席し、講演、ワークショップ、研究発表、グループディスカッションなど多彩な場を通して活発な意見交換が展開された。

## 総会あいさつ

関東・東北ブロック研究会リーダー  
東京工芸大学 大島 武

昨年 6 月の学会全国大会での役員改選に伴い、関東・東北ブロックのリーダーを拝命いたしました。前任の武田秀子先生のように完璧にこなすことはできないかもしれませんが、優秀な運営委員の先生方に支えられ、何とか任期を全うしたいと存じますので、よろしくご指導・ご支援のほど、お願い申し上げます。

大学・短期大学を取り巻く環境は厳しくなる一方で、私たちも日々の業務に追われ、なかなか自由な研究活動もできにくい状況にあります。でもだからこそ、年にそれぞれ一度の全国大会、ブロック研究会の機会を大切に、貴重な情報交換、あるいはリフレッシュの場にしていきたい、そのように考えております。

仲間の先生方と会いたい、いろいろ相談したい、刺激し合いたい、と思わせるようなブロックを目指し、新年度からは新たな研究会の助成=カテゴリーCもスタートします。

皆様の積極的なご参加により、関東・東北ブロックが益々活性化することを願っております。



## 2007 年度、2008 年度 共同研究について

サブリーダー (共同研究担当)

高崎経済大学 坪井明彦

2007 年度のブロック助成研究は、渡辺裕一先生をコーディネーターとした「積極性を養う参加型授業法」で、今回の研究会で発表があります (研究発表参照)。

2008 年度の助成研究は岡田小夜子先生 (高崎商科大学短期大学部) をコーディネーターとした「コミュニケーション教育に関する研究」となりました。2008 年度のブロック研究会で発表していただきます。

また、2008 年度よりブロックの共同研究を推進するため、単発の研究会 (勉強会) の助成を開始します。ブロック研究会での発表義務はありませんので、お申し込みください。詳細は同封チラシ「単発の研究会 (勉強会) 開催への助成について」をご覧ください。

### 基調講演

## 湘北短期大学の F D 活動

湘北短期大学前学長 山田敏之氏

湘北短期大学は平成 15 年、16 年、18 年に特色 G P、平成 19 年に学生支援 G P を受けています。

「真に社会に役立つ、人を率いていける人材の育成」をテーマに、教員と職員の連携体制を整え、情報の共有化、外部評価を梃子にしたマネジメントなど組織の調整をしながら、FD を進めています。具体的にはカリキュラムの改善、授業スキルの改善、外部人材のノウハウ吸収、主体的正課活動による教育などに力をいれています。特に主体的正課活動は教員も正規の業務と位置づけ、ファシリテーション能力を高めながら取り組んでいます。

## ワークショップ

### 1 「ビジ」標語作成を活用した相互学習・評価体験

宮田 篤 (青森中央短期大学)

一通り「秘書実務」「ビジネス実務」等を学習した受講者の総合演習を想定したワークショップである。ビジネス標語を作り、ポイントをプレゼンテーションし、さらに聞き手が別の人に伝える。評価は、①自作の標語を披露する場合、②他作の標語を紹介する場合の2段階で行う。台本を朗読するのではなく、自分の台詞として演じる感覚である。

グループワークは2人以上であればいつでもどこでも可能である。短い標語を繰り返し声に出すことから始める。「大きな口を開ける」ではなく、「口の中にリンゴを入れる」、「窓の外のあの看板に届くように」等、視覚イメージを活用する。クルマにたとえれば暖気。そしてクラッチをつなぐために標語を活用する。

標語の利点は下記の通りである。

- ①学んだ内容がすぐに使える
- ②短時間で作成可能な点である
- ③グループワーク向きである
- ④発表に動作・視覚等の表現を使いやすい

ワーク後の課題としては評価方法の改善が挙げられる。参加くださった先生方の声を反映し、さらにブラッシュアップを続けたい。

### 2 「やっぱり人を元気にするのはコミュニケーションだった

～たった一言で変わる人の気持ち、

人間関係～

首都大学東京 見館好隆  
株式会社はぐくむ 小寺毅

【目的】インターネットや携帯の普及に伴い、大学生は自分の気持ちを相手に言葉で直接伝える機会が減り、結果お互いが距離を置き無難な言葉を選んでコミュニケーションする傾向が見られる。

このワークの目的は、改めて言葉が持つ力と、言葉を直接相手に伝える効果を体感し、より良い人間関係をはぐくむ上で、「エネルギーが上がる言葉」を用いて、正確にかつ素直に生の言葉を用いたコミュニケーションの大切さを実感させることである。

【内容】①普段、自分が使っている言葉がいかに関心の心に影響を与えているかを、「心のコップ」をモチーフに説明する。②どんな言葉で落ち込んだり傷ついたりするのかを、グループワークで実際に使い、体感する。③どんな言葉で嬉しく感じたりやる気が上がったりするのかを、グループワークで実際に使い、体感する。④メンバーに対し、感謝を伝える手紙を書き、かつ生の声でそのメッセージを伝える。相手に気持ちをこめて、正確にそして素直に想いを伝えることが、自分にとっても相手にとっても大切であることを実感する。

### 3 「プレゼンテーション トレーニング

～指導者はグループメンバー～

飯塚順一 (湘北短期大学)

今回のワークショップで実施したプレゼンテーショントレーニングは、グループ編成後、1人の代表学生が繰り返し同じプレゼンテーションを行い、その都度、グループメンバーが代表学生のレベルアップを図る方法である。メンバーは代表学生の癖を客観的に判断し、どうしたらそのプレゼンテーションが向上するか考える。

このトレーニング方法においては、プレゼンテーションを行う学生にとっての自分の出来具合も気になるところであるが、グループメンバーの取り組みも得点に反映する。

これまででは、お互いに相手の改善点を認識していても、それを明確に指摘することなく、あいまいな表現で流してしまう学生達を多くみてきたが、このトレーニングにおいては、そうした学生気質を改善するためにも役立つ。

プレゼンテーション能力を向上させながら、メンバー間でのコミュニケーション能力もトレーニングできる効果的な手法であると考えられる。当日は、授業運営について、細かなアドバイスもいただくことができ、今後のさらなる改善に役立つワークショップとなった。

## 研究発表

### 1 「積極性を養う参加型 授業法」(2007年度助成研究)

風戸修子 (自由が丘産能短期大学)

鐘ヶ江弓子 (共栄大学)

北川直子 (カリタス女子短期大学)

竹之内幸子 (産業能率大学)

見館好隆 (首都大学東京)

渡辺裕一 (川崎医療福祉大学)

「参加型授業」を「受講者が授業に参加をして、自己の能力を発揮して課題達成に挑戦し、自己効力感を肯定できるような実感を抱く、教育効果(生産性)の高い授業」と規定し、メンバーが用いてきた教育技法を下記の7パターンに分類した。

①授業設計とガイダンスを重視する。②学生の発言や活動を促進する。③学生へのレスポンスを確実に行う。④教材を吟味する。⑤学生とラポールをとる。⑥講義形式の授業に動き(作業)を入れる。⑦学生のメディア環境に配慮する。

また2007年度後期授業で参加型の技法の一つである「ふりかえりシート」の効果的活用を検討・実践し、成果が上がることを確認した。

### 2 地域社会と連結したホームページ制作事例

佐藤 恵 (聖霊女子短期大学)

山内 征三 (聖霊女子短期大学)

私の担当するウェブデザイン実務士課程の教科の一つに、ホームページ制作技術の習得を目的とする授業を設けている。この中で、学生が地元の小企業などを対象に、事業PR用ホームページの制作を引き受けて作る手法を取り入れている。この狙いとしては、学生の実践的な制作技術をより高め、かつソフト面の能力を磨くための試みである。また、学生にとって地域社会の人たちに対して、少しではあるが貢献に寄与しているという意識の涵養にも繋がるだろうとの趣旨からである。

これまで実施の中で、最も大きな課題点として学生と依頼主とのコミュニケーション不足があげられる。制作の出来栄は双方のコミュニケーションの良し悪しが大きく影響する。制作の効果を高めるためにも、マナーや報告・連絡・相談といった基本的な接遇技法は不可欠である。その観点からもビジネス実務の複合的な導入が必要と考える。

### 3 「魅力行動」と ビジネススキル

#### —アンケート結果の考察—

古閑 博美 (嘉悦大学短期大学部)

金子 章予 (西武文理大学)

大学生に対し、自己の能力を高めたい「魅力行動」に関するアンケートを実施した結果、「1位態度、2位挨拶、3位笑顔」となった。選択式設問だけでなく、自由記述であげられた「1位態度(表情・立居振舞い・外見)、2位コミュニケーション(人間関係・チームワーク)、3位ことば遣い(敬語・接遇用語・話し方)」からも、学生は、自己表現やコミュニケーションに関する自己の能力を高めることへの関心が高いといえる。

それを受け、学生の自己表現やコミュニケーションの能力を高める方策の一つとして、「ささき親切(さっそく親切・さわやか親切・さりげない親切)」と命名した他者との関与の仕方、ならびに五つの魅力行動を提言した。五つの魅力行動とは、受容的行動:心地よくすんなり受け入れられる行動、審美的行動:何度でも出会いたい・行いたいと思う行動、親和的行動:状況が和み相互に親しみを覚える行動、理知的行動:TPO(時・所・場合)をわきまえた行動、社会的行動:社会で必要かつ望ましい行動、である。

## 4「基礎力成長のステップ

～対自己基礎力から対人基礎力、そして対課題基礎力へ～

首都大学東京 見館好隆

社会で働く上で必要とされる力「基礎力」は、行動及び行動を持続することによって成長する。では、獲得する基礎力に順位性はあるのだろうか。マクドナルドのアルバイト（以下クルー）に対して行った調査データを分析した結果、対人基礎力が平均よりも高いクルーは対自己基礎力が高く、対課題基礎力が平均よりも高いクルーは対自己基礎力及び対人基礎力が高かった。また、対人基礎力「情報共有」が有意に成長したクルーは、対自己基礎力「主体的行動」が有意に高く、対課題基礎力「情報収集」が有意に成長したクルーは、対人基礎力「気配り」が有意に高かった。この「対自己」→「対人」→「対課題」の順序性は、初年次教育やキャリア教育はもちろん、個々の授業において基礎力向上を企図する指針になりうると思う。このモデルが他社の事例でも観察できるのか、今後引き続き検証していきたい。

## 5 プレゼンテーション能力向上 をめざすグループ学習

常磐短期大学 高橋真知子

「プレゼンテーションをしてください」と言う途端に学生の口も体も表情も硬くなってしまふ。人前で話すことの教育を受けることがほとんどなかった学生にとって、プレゼンテーションは「憂鬱」でしかない。

本発表は、プレゼンテーションの実技指導の初期において大切なことは、この苦手意識を低減することではないかと考え、グループ学習を基本に進めた事例発表である。

課題に対する講義の後、4～6名のグループのなかで質疑応答や意見交換を重ねていき、最後にクラス全体に発表する。学生が相互交換するコメント用紙や振り返りシートを活用しながら指導していく過程を紹介させていただいた。

研究会の席上、ビデオの扱いについて、ご参加いただいた先生方から貴重なご意見やお知恵を多数いただきました。心から感謝申し上げます。

## 6 ファカティ・ディベロップメント の現状と課題

東京工芸大学 大島 武

本発表では、まず大学・短大のファカルティ・ディベロップメント（FD）を概観し、研修会・授業評価中心の現状について説明した。また、マンパワーに勝る国立大や大規模私大の成果が先行し、様々な事例が発表されている状況を指摘した。

次に、発表者が客員として関わる山形大学の個別支援型FDを紹介した。これは、総論的になりがちな授業法改善の試みに個別の問題解決という視点から取り組んだものである。授業に悩む教員に対し、医師の診断・処方のように、問診・授業見学・授業記録・ふりかえり・コメントシート等様々な手法を駆使し、授業改善に取り組んだ。

発表者は録画された授業を分析し、コメントする役割を担ったが、ここで痛感されたのは、授業内容と手法が不可分である点であった。ビジネス実務という共通領域において長年教授法研究を進めてきた当学会の役割は、FD本格化で益々高まると結論付け、発表を終えた。

### テーマ別

### フリーディスカッション

情報交換会として、以下の8つのテーマに分かれ、活発な意見が交わされた。

#### 1 コミュニケーション

コミュニケーションで大切なことは、相手を受け止め（受容）、相手の話を聞き（傾聴）、相手の存在を認める（認知）ことである。ビジネスマナーの基本である挨拶も重要なのは行為そのものではなく、結果として相手の顔や名前を認知していると伝えられることに価値があるのではないかと。

書記：藤原由美（自由が丘産能短期大学）

## 2 プレゼンテーション

参加者 3 名中 1 名が、新会員・初参加の動機として「大学院での「プレゼンテーション」教育の必要性」についての発言がある。そのことから、短大・四大の「プレゼンテーション」教育の現状並びに学会主催の「プレゼンテーション教育指導者セミナー」（基礎編・応用編）紹介し、さらに米国ビジネススクールにおける「プレゼンテーション」教育の現状等質疑応答により深めるディスカッションの機会を得た。

書記：三村善美（福島学院大学短期大学部）

## 3 ビジネスマナー

ビジネスの現場の多様化による「ビジネスマナー」の変遷についてディスカッションした。「かたち」だけではなく「こころ」の表現が大切である。「意味」や「心の根のところ」を教え、授業の開始と終わりに「おじぎ」を学生が自発的にすることを実践している。

書記：西村 この実（常磐短期大学）

## 4 ITリテラシー

即戦力となる学生を育てる為に授業成果や問題点、改善点などについてメンバー（石井、佐藤、曾我）で意見交換を行った。ITスキルだけでなくビジネスの知識やコミュニケーション能力を身につけさせる新たなIT教育の必要性を共有した。

書記：曾我恵美子（湘南短期大学）

## 5 インターンシップ

インターンシップが単位化され多くの学生が対象になった時の問題や課題について情報交換がなされた。特に、希望の場所や職種のマッチングの難しさ、受け入れ企業の開拓や交渉・訪問の手間、評価方法など多くの問題点が議論された。

書記：大宮智江（川口短期大学）



## 6 ゼミ運営

メンバー 4 名（山口、渡辺、寺村、畠田）がそれぞれ自分のゼミの内容を含めて自己紹介を行い、その後、初めてゼミを持つ先生もいることから、どのようなゼミがよかったか、また運営上一番大変なことは何かなどを話し合った。

書記 畠田幸恵（湘南短期大学）

## 7 就職支援

メンバー（阿部、北川、藤田、鎌田）が所属する各校の現状から「保護者対策」「就職対策の開始時期」「ガイダンスやセミナーの単位化」などについて意見交換を行った。他校の取組を知り、問題点を共有することは、大変有意義であった。

書記：鎌田りみ（湘南短期大学）

## 8 授業評価

評価を受ける教員側の一部にまだ抵抗感が残り、評価する学生側のレベルも多様化している。ただ、評価そのものを目的にしてはならない。「教える」「教わる」双方にとって、いかにフィードバックするかという検討こそが肝要と思われる。

書記：宮田篤（青森中央短期大学）

### 事務局から

本年度の当番校は湘北短期大学の長谷川先生、飯塚先生、協力校は鶴見大学短期大学部の牛島先生でした。先生方、お疲れ様でした。

来年第 36 回関東・東北ブロック研究会は下記の日程で行われます。

日時：2009年2月15日(日)

場所：鶴見大学会館

当番校：常磐短期大学

協力校：鶴見大学

皆様スケジュール表にお書き込みをお願いします。当番校の高橋先生、アドバイザー役の湘南短期大学の畠田先生、協力校の牛島先生、どうぞよろしくお願いたします。

平成 20 年 3 月 14 日 関東・東北ブロック研究会事務局発行

編集責任者 大島武（東京工芸大学）

編集担当者 岡田小夜子（高崎商科大学短期大学部）